

はじめに:

歯科診療を行うにあたり、矯正治療を治療計画に含めることで、その後に行なう修復処置の予後やう蝕および歯周病の予防に大きな影響をもたらします。しかしながら、矯正治療を行なうには専門医と連携をするか、専門的な知識を身につけたうえで多くの経験を積む必要があります。また、多くの費用がかかることや治療期間が長いイメージがあり、患者さんにも敬遠されがちです。そこで、比較的短期間で高い効果の得られる部分矯正を行うことで良好な結果が得られた症例を報告します。

パノラマX線写真



患者概要:

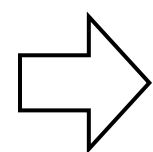
女性 26歳

- ・主訴 右下の黒いところが気になる
- ・現病歴 主訴である右下は前医によるコンポジットレジン修復が行われている。しかし、歯列不正があり十分な修復が行われていないため、食片圧入による違和感や色調の問題を訴えて来院
- ・既往歴 特記事項なし 歯科治療時の不快症状なし



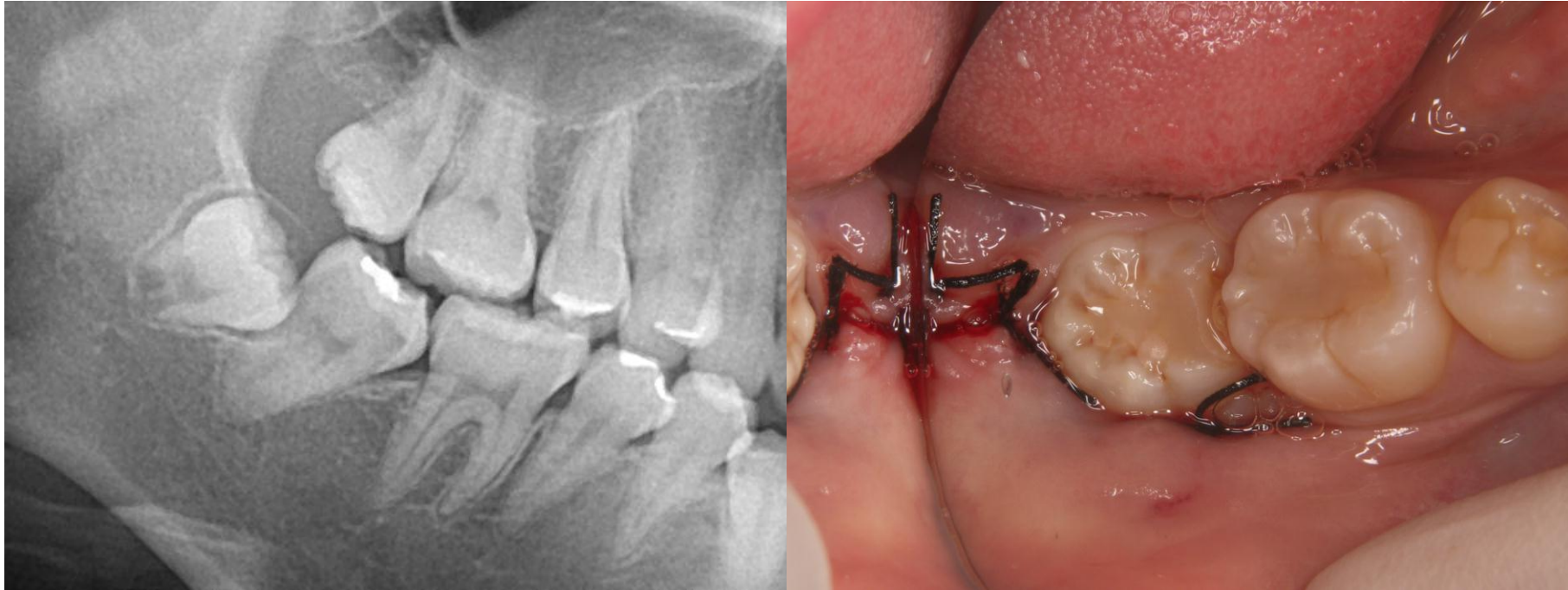
問題点：

- ・上下前歯部の叢生
- ・左上7の頬側傾斜によるクロスバイト
- ・右下7の近心傾斜による不良修復物とそれに伴う右上6の挺出



患者さんと相談した結果、主訴である右下7の修復前処置としての部分矯正を希望されました。

H23.5.17



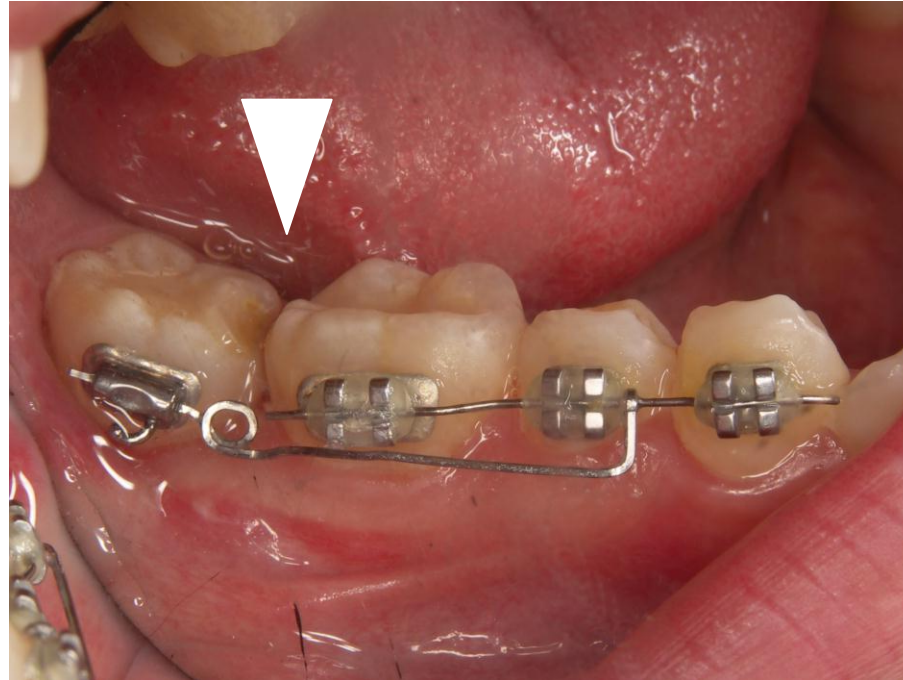
部分矯正を行う前処置として埋伏智歯の抜歯。

H23.6.17



左下7を遠心傾斜させて正直させた後に近心への歯体移動を行うこととした。

H23.6.24



1週間後にわずかな遠心傾斜を確認。

H23.7.7



さらに2週間後に健全な辺縁隆線を確認。そこで、1級窩洞による修復を目標にする。

H23.8.16



遠心傾斜とともに歯間離開が顕著に認められてきたため、装置を変更して近心移動させることとした。

H23.9.27



近心移動が認められ、コンタクトの回復を認める。

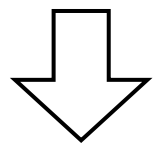
H23.10.31



近心頬側咬頭に咬合接触を確認した。咬合調整を行いながら、咀嚼による咬合の緊密化を期待する。

初診時

H23.4.4



H23.10.31



右下67の歯根の平行性が得られた。

H23.11.24



大臼歯部の隣接面を保存し、1級窩洞のインレーで修復を行った。6,7番の機能咬頭に垂直的な咬合接触を認める。わずかに挺出している右上6には側方運動時および前方運動時に干渉を認めない。理想的な咬合は得られていないが臨床的に問題ないと判断した。

まとめ：

今回、主訴である7番近心の修復処置を行うにあたり、部分矯正を行い近心傾斜を改善したうえでコンタクトをインレー修復する治療計画であった。しかし、傾斜を改善すると健全な隣接面部歯質が確認できたため天然歯によるコンタクトを付与することができた。そのため歯質の削除量を最小限に抑えることができるとともに、修復物とのマージン部におこりやすい2次カリエスや歯周病のリスクをおさえることのできる可能性があり良好な結果が得られたと考える。

しかしながら、顎骨に対するスペースの不足から7番の遠心歯肉が高位となったため今後のメンテナンス時に注意が必要であると考えます。

2 4 3 4	2 3 3 3	3 3 3 2	3 3 3 2	3 3 3 2	2 3 3 2	2 3 3 2	2 3 3 2	2 2 3 3	1 3 1 3	2 3 3 2	3 3 4 3	4 4 4 2	4 4 4 4
7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7
4 4 3 2	3 3 3 2	3 3 3 2	3 3 3 2	3 2 4 2	3 4 2 2	2 3 3 2	2 2 3 2	3 3 3 2	2 2 2 2	3 2 2 2	3 2 2 2	3 3 3 2	3 3 3 2

EPP (H23.7.21)

赤→出血した部位

P検査 (H23.7.21)

2 43 4	2 33 3	3 33 2	3 33 2	3 33 2	2 33 2	2 33 2	2 33 2	2 23 3	1 31 3	2 33 2	3 34 3	4 44 2	4 44 4
7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7
4 43 2	3 33 2	3 33 2	3 33 2	3 24 2	3 42 2	2 33 2	2 23 2	3 33 2	2 22 2	3 22 2	3 22 2	3 33 2	3 33 2

- ・特に歯間部における歯肉の腫脹があり、ポケット3~4mmの部位が目立つ。
- ・歯頸部の磨き残しがある